

文化論集第64号  
2025年6月

## 消 息

### 荒井訓先生のご定年退職にあたって

荒井訓先生は、2025年3月31日をもって定年によりご退職されることになりました。本稿では、これまでの先生のご経歴、主要な研究業績を紹介し、商学部へのご貢献を改めて振り返るとともに、荒井先生にこれまで筆者がお世話になったエピソードを記したいと思います。

荒井先生は、1954年9月に東京都にお生まれになり、東京都立立川高等学校を経て、1974年4月に早稲田大学第一文学部に入学、3年在学時に出会ったF. シュレーゲル (Friedrich Schlegel, 1772-1829) の「ひとつの体系をもつことも体系をまったくもたないことも精神にとって等しく致命的である。それゆえ、おそらくその両者を結合するように決心しなければならないだろう」という断章により、シュレーゲルおよびドイツ・ロマン主義の思想に関心を持つようになり、長年ご研究された成果が2024年12月に出版の『超解説！はじめてのフッサール「イデーン」』に繋がっていったそうです。1978年に第一文学部（ドイツ文学専攻）を卒業後、同年4月に早稲田大学大学院文学研究科博士前期課程・ドイツ文学専攻に入学され、「シュレーゲルを研究対象としたところほとんど翻訳がなく、シュレーゲルが残した多くの難解な書物・文章を一定程度読むだけで3年を要し、4年目でようやく修士論文を提出して前期課程を修了した」とのことです。そして、1984年4月に早稲田大学大学院文学研究科博士後期課程・ドイツ文学専攻へと進学されました。1987年3月に同研究科同課程を単位取得満期退学されています。大学院在学中には、シュレーゲル研究の先駆者であり商学部で長らく教鞭をとられた山本定祐先生の教えを受け、旧9号館の山本研究室にもたびたび足を運ばれたということです。もしかすると、筆者も大学院在学中に旧9号館で荒井先生にお目にかかっていたのかもしれませんが。

1982年4月より早稲田大学高等学院非常勤講師に着任され、1983年4月から日本大学芸術学部、1984年4月から国立東京工業高等専門学校、1987年4月から早稲田大学

第二文学部および横浜国立大学教育学部において、非常勤講師として教壇に立たれました。

1988年4月に東北大学教養部専任講師に就任された後、1991年4月に東北大学教養部助教授に昇任され、1993年には教養部改組により、東北大学言語文化部助教授になりました。1998年月に商学部助教授として本学に着任されたときには「山本定祐先生と同僚になったことで、商学部との不思議な縁を感じた」ということです。2005年4月には本学教授に昇任されました。また、2002年4月以降は、早稲田大学エクステンションセンター・オープンカレッジ講師として、「リピーター」の受講生も多くいらっしゃるドイツ語の人気講座を担当され、ご定年後も引続きこの授業をご担当の予定だそうです。

さて、荒井先生のご研究について、ご自身のお言葉を借りして「研究活動の対象・方向性の変遷」としてご紹介いたします。大学院在学中から東北大学在職時までは、先述のシュレーゲル研究を中心に、18世紀から19世紀にかけての思想史的研究に取組まれました。この間、1987年11月より1988年1月まで、ドイツ連邦共和国外務省奨学生としてゲッティンゲン市のゲーテ・インスティテュートにて研修を受けられました。

また、1993年8月より1996年3月まで、国際交流基金海外専門調査員として、ケルン日本文化会館に東北大学から長期海外出張され、ドイツの文化交流機関調査、青年日本語教師派遣のためのドイツの中高等教育機関調査、第43回ベルリン祝祭週間（テーマ：日本）の支援・評価分析、日独出版交流の計画・実施、18世紀から第二次世界大戦まで主要な書籍見本市だったライプツィヒ書籍見本市の復興計画の一環として日本ナショナル・ブース出展の計画・実施、各種芸術ジャンルの公演・講演・展示・上映等の計画・支援および評価分析（梅若研能会、文楽協会等の巡回公演、大島渚監督や鈴木清順監督の巡回公演・上映、河原温展、大江健三郎巡回公演、山下洋輔等のジャパン・ジャズのライブツアー）、第二次世界大戦前・中・後に在日していたドイツ人のメモワール調査（インタビューの成果はドイツにおいて *Gelebte Zeitgeschichte: Alltag von Deutschen in Japan 1923-1947* として、日本語版は『戦時下日本のドイツ人たち』として出版）ほかに従事されました。この長期出張では、「国レベルの文化交流の現場で働くという、大学教員としては貴重な経験を積んだ」ことで「具体的対象の研究が中心となった」とご自身で回想されています。

さらに、2008年3月より2009年3月まで、フンボルト大学ベルリン第3哲学部文化学科客員研究員として在外研究期間を過ごされました。フンボルト大学ベルリンでは、Kulturwissenschaft（文化科学）の著名な教授、Harmut Böhme（ハルトムート・ベーム）教授のゼミに参加されました。他方、ベルリン自由大学のアーカイブに通い詰め、戦後ドイツにおけるジーンズに関する記事を収集され、ジーンズがどのように表象されたか、とくにそれが社会を動かす要因（東西ドイツ再統一の原動力のひとつ）としてどのように働いたか、を研究されました。その成果が「Wer blau macht. 一表象としてのジーンズ」（2022）で、「具体から抽象へ」という研究」になったそうです。

そして、2016年に当時、国際教養学部教授であった、哲学者であり、長年のファンであった竹田青嗣先生との共同研究を始められたそうです。竹田先生との出会いは、同じ現11号館13階にお二人の研究室があったことが、きっかけであったそうです。荒井先生にとっては、これまた早稲田大学商学部在職なさっていたからこそのご縁かもしれません。竹田先生の門下生を加えて、ニーチェ、ハイデガー、フッサールについての講読会を現在も継続中だそうです。竹田先生との共著『超解説！はじめてのフッサール「イデーン」』はその果実だそうでして、当初研究対象とされたシュレーゲル研究への回帰とも言える「抽象的研究」となりました。この点について荒井先生ご自身に解説いただいた文章がありまして、引用すると、下掲のとおりです。

エドムント・フッサール（Edmund Husserl 1859-1938）の現象学をごく簡単に要約すると、次のようになる。「意識が対象をどのように構成し、対象が経験として意識にいかにも現れるかを探求したフッサールの現象学は、物事が現れる過程を分析することで、意識の働きが対象の〈本質〉をどのように捉えるかを示した。これにより、従来の西洋哲学における客観的实在や外界の独立性という概念を批判し、対象は常に意識によって〈現象〉として捉えられることを示した。このアプローチは、客観性を外的存在に依存させるのではなく、経験の流れを通じて成立するものだと論じ、認識論に革命をもたらした」。客観的实在、外界の独立性を否定した現象学の考え方は、大学時代の（先述した学部3年次の）着想と通じており、その意味でシュレーゲル研究への回帰とも言える。

荒井先生の研究領域・研究対象は、ドイツ・ロマン主義の思想（18世紀末～19世紀前半のドイツ思想・文学理論）、ドイツ文芸システム論（18世紀後半～19世紀前半に

ドイツにおいて書籍流通システムが成立し、文芸の状況が大きく変容していく過程を社会的視点から追究)、文化交流論(日独文化交流を中心に、国際交流の現状を実践の見地から調査・研究)、ドイツ文化論、ヨーロッパの思想史、と多岐にわたっております。先生の主要な研究業績は、末尾に示すとおりであります。

このようなご研究を踏まえ、荒井先生は、商学部および大学院文学研究科でドイツ語の授業で教鞭を執られました。また、商学部では、2010年9月より2012年9月まで学生担当教務副主任を、2014年9月より2016年9月まで学生担当教務主任を、2016年9月より2020年9月まで2期4年にわたり入試担当教務主任をお務めになり、商学部の運営のために尽くされました。さらに、GECにおいても、2020年9月より2022年9月まで教務主任を、2022年9月より2025年3月まで副所長をお勤めになり、大学および商学部の運営にご尽力をいただきました。荒井先生の早稲田大学での勤続年数は、1998年4月1日から2025年3月31日まで27年間となります。

学外では、先述のとおり、1993年8月から1996年3月までケルン日本文化会館で勤務されましたほか、2001年4月より2003年3月までNHKラジオのドイツ語講座講師を担当なさり、また、2007年6月より2024年5月まで(公財)ドイツ語学文学振興会の常務理事を務められ、社会的な貢献もなさいました。

ここからは、筆者が荒井先生にお世話になったエピソードをご紹介します。先生と懇意にいただいているのは、2010年9月より2012年9月まで、恩蔵直人先生が2期目の学部長に就任され、先生が学生担当教務副主任に、筆者が学生担当教務主任に着任したときからです。着任早々から、学生やご家族への対応などの案件が多々ありましたが、そのときに荒井先生が面談において学生を諭すお言葉に、筆者も何度安心感をいただいたことかわかりません。2011年3月11日には、学生担当教務主任会の開会数分前に学生会館で待機していたときに、東日本大震災が発生しました。このときは、恩蔵学部長の陣頭指揮のもと、学生生活への対応をするために荒井先生と様々な課題に取り組みました。一緒に仕事をしていくなかで、荒井先生が小学生から町道場で柔道を始め、高校では柔道部にもご所属なさったというお話をうかがい、筆者も高校時代柔道部に在籍していたこともあり、学生担当の業務以外でもいろいろな話題を共有するようになりました。ときには、食事をご一緒したりすることもありましたが、当時の先生は日本酒を召し上がりませんでした。

そして、嶋村和恵先生が2期目の学部長に就任されたときには、荒井先生が学生担当教務主任に、筆者が教務担当教務主任に着任し、同じチームで働く機会が二度目となりました。このときにも、いろいろな情報交換をしながら、他の教務の先生方とともに、嶋村学部長と一緒にお支えしました。

その直後も先生は、藤田学部長を入試担当教務主任として2期にわたってサポートされました。その任期中の2018年の一般入試直前に、高校時代からの長いお付き合いであった最愛の奥様をなくされました。

コロナが収束した後、荒井先生と大学でお目にかかる時、食事に行く約束の機会を模索しております。昨今は、日本酒を召し上がるようになり、その銘柄や酒蔵についてとても造詣が深くなりました。当方も、もう少し修行したいと思っております。

荒井先生、長い間、商学部および早稲田大学のためにご尽力、ご貢献いただき、ありがとうございます。また、個人的には、これまで本当にお世話になりました。今後も、ますますご健勝で、充実した日々を送られることをお祈り申し上げます。そして、また、おいしい日本酒とお料理をご一緒できることを、楽しみにしております。

長谷川恵一

## 【主要業績】

### 《単著》

2003年『初めてのドイツ語会話』ナツメ社。

2012年『使える！ドイツ語会話』同学社。

### 《共著》

1988年『一冊で世界の名著100冊を読む』友人社。

2001年～2003年『NHKラジオドイツ語講座』日本放送出版協会、全14冊。

2003年『戦時下日本のドイツ人たち』集英社新書（上田浩二氏との共著）。

2024年『超解説！はじめてのフッサー「イデー」』講談社現代新書（竹田青嗣氏との共著）。

### 《編著・共編著》

2000, *Gelebete Zeitgeschichte: Alltag von Deutschen in Japan 1923-1947*, IUDICIUM

Verlag.

《論文》

- 1983年12月「Fr. シュレーゲルの『ロマン主義文学』の構造1」『ANGELUS NOVUS』  
（早稲田大学大学院文学研究科）第11号，1-18頁。
- 1984年12月「Fr. シュレーゲルの《ポエジー》概念について」『ANGELUS NOVUS』  
（早稲田大学大学院文学研究科）第12号，49-64頁。
- 1987年2月「フリードリヒ・シュレーゲルにおける『小説』の概念」『早稲田大学文学  
研究科紀要別冊』（早稲田大学大学院文学研究科）第13輯，27-35頁。
- 1988年5月「フリードリヒ・シュレーゲルの絵画論」『ドイツ文学』（日本独文学会）  
第80号，71-79頁。
- 1991年12月「Fr. シュレーゲルの『ロマン主義文学』の構造2」『東北大学教養部紀要』  
（東北大学教養部）第57号，97-117頁。
- 1996年12月「ドイツにおける各国文化交流事業とドイツの対外文化政策の理念」『言  
語と文化』（東北大学言語文化部）第6号，25-48頁。
- 1997年12月「18世紀末のドイツにおける『読書革命』をめぐって」『言語と文化』（東  
北大学言語文化部）第8号，1-25頁。
- 2004年9月「本を読むことの現在」『文化論集』（早稲田商學同攻会）第25号，245-281  
頁。
- 2022年9月「Wer blau macht. 一表象としてのジーンズ」『文化論集』（早稲田商學同  
攻会）第61号，1-52頁。

《資料》

- 1999年9月「終戦前対日ドイツ人の体験」『文化論集』（早稲田商學同攻会）第15号，  
97-132頁。
- 2000年3月「終戦前対日ドイツ人の体験(2)」『文化論集』（早稲田商學同攻会）第16号，  
269-311頁。
- 2000年9月「終戦前対日ドイツ人の体験(3)」『文化論集』（早稲田商學同攻会）第17号，  
101-154頁。
- 2002年3月「終戦前対日ドイツ人の体験(4)」『文化論集』（早稲田商學同攻会）第20号，  
209-243頁。

2002年9月「終戦前対日ドイツ人の体験(5)」『文化論集』(早稲田商學同攻会)第21号,  
77-136頁。

《翻訳》

1994年『第43回ベルリン芸術週間報道資料集』(ベルリン祝祭週間公社)202-422頁